

# 西洋文化に影響を与えた東洋文化

——陸羽からビートン夫人へ——

田 中 朋 子

## はじめに

相愛女子短期大学では、16年間にわたり夏期英国研修を行い、1999年アングリシア・ポリテクニック大学との姉妹校締結により短期6ヶ月奨学金短期留学も行っている。研修に参加した学生たちは、緯度・経度の異なりによる気候の違い、言語の違い、文化の違いをホームステイ・語学研修・フィールドワーク・フィールドトリップを通し、膚で感じて感動と自信に満ちて帰国するのが毎年のことである。参加にあたって、いろいろな準備品の他に、アフタヌーンティーの有名店の切り抜きなどを持ってくる学生もいて、イギリス文化の代表的なものといえば、ティーやガーデニングを挙げることは間違いではないであろう。大学の授業でも、11時ごろに一度休憩時間が与えられる。この休憩時間はティータイムで、これがイレブンジズ (elevenses) と呼ばれるモーニングティーブレイクである。少し以前のイギリスのオフィスであれば、tea lady のサービスが受けられる時間である。時代の移り変わり、生活様式・嗜好の変化などにより、そのティーの飲み方の変化はあるとしても、現在においてもイギリスのティーの一人当たり年間杯数<sup>(1)</sup>が多いことからティーの国といえる。このティーがどのようにイギリスのものとして築かれ、人々の関心をさそってきたのかを考察していきたい。

## I 茶の歴史

### 1 茶の樹と茶の葉

わたしたちは、日本茶をチャ、紅茶をティーと呼んでいる。この場合、私たちは全く異なった物を想像するが、チャ (cha) とティー (tea) は共に茶であり、この茶の樹の学名をカメリアシネンシス (camellia sinensis) とよぶ。カメリア (ツバキ属) は、東南アジアに広く分布し、ヒマラヤ南部から中国西南部、日本に及ぶ照葉樹林帯植物として生育している。1935年植物学会で茶は椿科に属すると判断された。また、茶の樹は中国



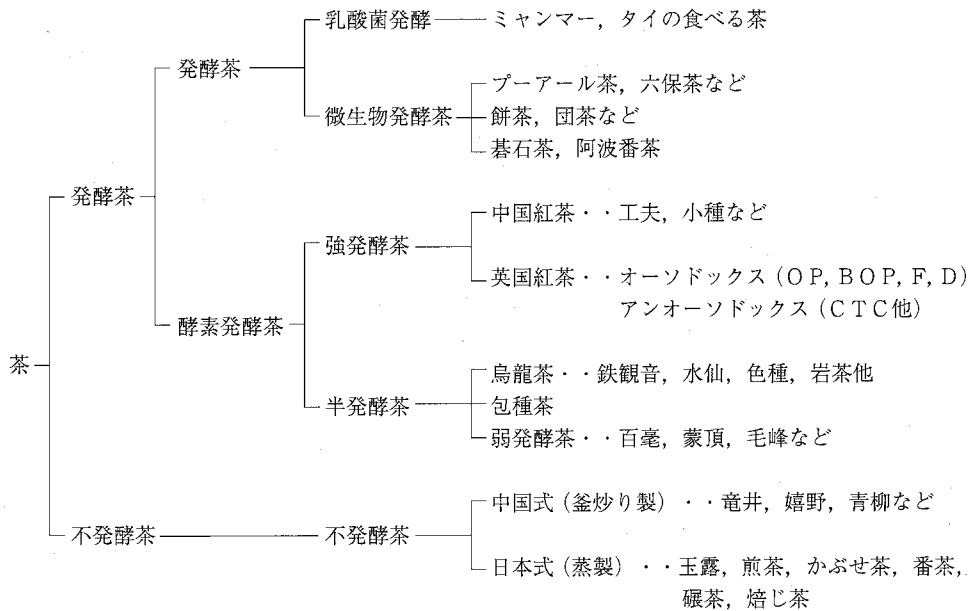
カメリアシネンシス (椿科)

の雲南省を中心にした栽培種である。世界最古の「茶樹王」が現存する西双版纳（シーサンパンナ）（秦族・タイ族）自治州は有名である。

## 2 製法による茶の分類

同じ椿科（カメリアシネンシス）をチャとティーに分類する方法が、発酵・不発酵・半発酵の製法である。下表からもわかるように日本茶は最初の段階で発酵を止め、紅茶は発酵を促すことが大きな違いと言える。また、中国茶の代表とされるウーロン茶は半発酵茶である。

### 製法による茶の分類



出典『紅茶の事典』荒木安正他より

## 3 茶の記述

茶に関する体系だった書物として760年中国の僧で「新唐書」の「隱遁列伝」に名を刻んでいる陸羽の「茶経」である。日本の茶道の創始者とされる千利休の高弟南坊宗啓による書「南方録」は陸羽の著となる「茶経」の「一之源」に基づいている。そして、この茶経は現在も茶道のバイブルとしても注目されている。760年、唐代の書物は「史書」や制度を記したも



陸羽『茶経』

のを除くとほとんどが散文風で体系だった文章を構成することはない。茶経は項目別に部を設けて、全容を体系付けて記述されている。

内容は「一之源」で茶の起源、「二之具」で製茶に使う道具、「三之造」では、製茶工程、「四之器」は茶器について語り、「五之煮」は茶の点てかたと火や水の良否、「六之飲」では飲料と茶の関連人物、茶の種類、悪しき飲み方、「七の事」では、茶経以前の書物、「八之出」では、茶の産地とその優劣、「九之略」は、略式の茶の作法、「十之図」では、茶経を掛け軸として掛けておくことなどがしるされている。

#### 4 茶の呼び名

茶の樹と茶の葉の項で述べたごとく、チャの原産地は紅茶も緑茶もすべて中国にあると考えられるが、伝播経路により呼び名が異なる。

**広東省 cha** インド cha (チャ)、チベット ja (ジャ)、日本 cha (チャ)、ペルシャ cha、トルコ chay (チャイ)、アラビア chay (シャー)、ロシア chai (チャイ)

**福建省 te** インドネシア te (ティー)、オランダ thee (ティー)、イギリス tea (ティー)、フランス the (テ)、イタリア te (テ)、ハンガリー te、北欧 te、フィンランド tee、スリランカ they (ティ)

#### 5 茶の伝播

16世紀、ヨーロッパは大航海時代を迎えた。①1492年スペイン王の命を受けたコロンブスが西インド諸島の発見（アメリカ大陸）②1498年ポルトガル人ヴァスコダガマ喜望峰を回ってアメリカ西海岸に到着 ③1519～22年スペインの命によりマゼラン世界一周 彼らを3大発見にかりたてたのは、アジアのスパイスであった。スペイン・ポルトガルに続いてオランダ・イギリス・フランスもそれぞれアジア貿易専門の東インド会社をつくりアジアとの交易にのりだし、オランダの東インド会社が初めてヨーロッパに茶を伝えた。それは紅茶ではなく、緑茶であった。「オックスフォード英語大辞典」(OED)によれば、英語の単語に cha がはじめて使用されたのは、W. フィリップが訳したオランダのリンスホーテンの「東方航海記」(1595年)の中で述べられた chaa という綴字である。

The aforesaid warme water is made with the powder of a certaine hearbe called Chaa.

先に述べたあつい湯は、茶と呼ばれる葉の粉を入れてつくられる。

この「東方航海記」は1598年ロンドンでもウィリアムフィリップにより翻訳され、英国で初めての茶を記した出版物となった。すなわち文献的に見るかぎり、cha は tea よりも半世紀ほど前に使用されていて、ことばとしては、cha が先に用いられていたことは間違いのないとみられている。

イギリスは1669年オランダ本国からの茶の輸入禁止の法律を制定し同時にイギリス・オランダ戦争（1652～1674）をはじめた。中国から直接輸入した茶が初めてイギリスに流通したのは、オランダとの戦争に勝利を収めてから15年後の1689年のことであった。イギリスでは自国の東インド会社 “The Governor and Company of Merchants London



コーヒーハウスの内部

into East Indies” が「紅茶」を輸入しはじめるようになって、cha よりは tea が一般的に用いられるようになった。17世紀中頃、イギリスではロンドンを中心にコーヒーハウスが流行し、コーヒーハウスでは1ペニーの入店料だけで客に新聞を読ませるサービスを提供したため商人たちの情報交換の場となった。世界で有名な保険会社ロイズはこのコーヒーハウスから生まれ、イギリス近代社会を支えるシステム作りに貢献した。ギャラウエイ・コーヒーハウスは有名で、イギリスでの紅茶の普及はこのコーヒーハウスに負うところが大きい。1658年9月30日当時最も人気のあった定期刊行物・週刊ニュース誌「マーキュリアス・ポリティカス」に掲載された広告は綴り字の面からも興味深い事実を含んでいる。

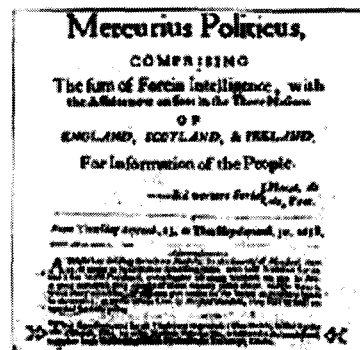
The Exellent and by all Physitians approved, China drink called, by the Chineans Tcha, and other Nations Tay, alians Tee, is sold at the Sultanness-head, a Cophee-house in Sweetings Rents, by the Royal Exchange, London.

中国人によって、「チャ」、ほかの国民には「テイ」または「ティ」と呼ばれる、すべての医師が折り紙をつけられた素晴らしい中国の飲み物が、王立取引所近くの Sweetings Rents にあるサルタネス・ヘッド・コーヒーハウスで売られていると記されている。

## 6 東洋文化の浸透

その後、イギリスの東インド会社が福建省の武夷産紅茶を緑茶にかわって輸入し、次第に上流社会にも普及した。また、1730年代に誕生したティーガーデンは音楽などとともに紅茶を出す屋外の娯楽施設として栄え、戸外のティが楽しめ、後に、女性主体のアフタヌーンティーが家庭で一般化するきっかけにもなった。

1662年英国王チャールズⅡの元へ興入れし



世界最初の紅茶の告知広告

(茶の輸入の告知)  
The Exellent and by all Physitians approved, China drink called, by the Chineans Tcha, and other Nations Tay, alians Tee, is sold at the Sultanness-head, a Cophee-house in Sweetings Rents, by the Royal Exchange, London.

マーキュリアス・ポリティカスの広告

たポルトガルのキャサリン・オブ・ブラガンザ皇女は膨大な持参金をもたらし、その中に茶や砂糖などがあった。このキャサリンは瞑想と喫茶にふけり、後には宮廷でレディたちとお茶会を毎日開いたこともあり、**The first tea drinking queen** と呼ばれている。ウィリアム公とメアリー王妃、メアリーの妹のアン王女も茶を好み、シノワズリー（東洋趣味）愛好家で「チャイナ」と呼ぶ陶器、「ジャパン」と呼ぶ漆器を愛し、「クイーン・アン・スタイル」という洋ナシ形の茶器をつくらせた。茶を飲む習慣が上流社会へと広まり、後にはベッ



茶会のシーン  
取っ手のないカップを使用

ドフォード公爵夫人アンナ・マリアが午後の茶会を華やかなものとして定着させた。茶を通してヨーロッパ人が東洋に接したとき、茶は神秘的な飲み物であったばかりではなく、その背景も文化も憧憬の的で、特に白くて硬い陶器はヨーロッパにはなくドイツ・ザクセン王の命を受け、ヨハン・ベッドガーがマイセンでヨーロッパ初の陶器製造を成功させた。やがてその製法がヨーロッパ各地に伝わり、イギリスではボーンチャイナが生まれるなど東洋文化を手本に茶の文化が変化しながら西洋に浸透し、中国製の小さな取っ手のないカップでんでいた茶も次第にカップが大きくなり把手がつけられ使いやすくなり **tea** そのものだけではなく、**tea-chests, silver kettles, silver tea strainers, porcelain slop bowls** などの道具も上流社会の必須のものとして、独自の **tea** 文化を築いた。

## 7 茶を巡る争い

上流社会では社交のアフターヌーンティー、庶民には癒しとして茶が普及していった。

1760 年当時、イギリスへ輸入された茶の 4 分の 1 がアメリカに再輸入されていたが、イギリス政府はフランスとの 7 年戦争で財政が苦しくなり、その一策として、アメリカ向けの生活必需品に課税したことで、アメリカ植民地の人々の反対運動がはげしくなり、他の税金は廃止したものの茶の税金だけを残した。1773 年イギリス東インド会社の船がボストン湾に 2 隻入港、植民地の男たちがこれらの船を襲い、積荷の 342 個の茶箱を湾に捨てる事件が起こる。これが有名なボストン・ティーパーティである。これがきっかけとなりアメリカ独立戦争がおこり 1776 年 7 月 4 日アメリカはイギリス本国からの独立することとなった。（独立戦争を通じ、茶を飲まないことが、愛国者としての心意気、茶断ちを断行し、次第にコーヒー党が増加したといわれている）

イギリスの茶の消費増加<sup>(2)</sup>により、中国茶の輸入が増え、イギリス国内では茶代金の支払いの多額の銀が流出への批判が高まったため、イギリス商人たちはインドのアヘンを中国に輸出し、その代金で中国から茶を買いつけた。中国清政府はアヘン禁止令を出しアヘンを密輸するイギリス船とのトラブルがもとでアヘン戦争（1840）がはっ発。この戦争の結

果、敗北した清朝は、屈辱的な南京条約を結び、香港をイギリスに割譲するほか、上海など5港を開港することになった。茶によって引き起こされた事件でアメリカは自由を、中国は屈辱と隷属との明暗を分けることとなった。

## 8 茶の運搬

1833年イギリス東インド会社の中国茶輸入独占廃止。1849年航海条令廃止。これにより茶はどこかの国の船が運んでも良いこととなり、ロンドンの茶商人たちは一年以上かかっていた中国ロンドン間を100日あまりの短期間で運び新鮮な茶を高く売ることが行われた。ウィスキーの銘柄で有名な「カティサーク号」は最新鋭のティークリッパーとして進水した。この後まもなくスエズ運河が開通したことで20年間のレースも幕を閉じた。

## 9 cha から tea へ

1784～86年、中国の安徽省祁門<sup>キーモン</sup>にて烏龍茶やその三番茶によって作られる武夷茶<sup>パイチャ</sup>から発展し、工夫茶よりさらに強酸化した紅茶<sup>ロングーティー</sup>が作られていった。紅茶は、外観から黒っぽい茶 (black tea) とよび、緑茶 (green tea) と区別するようになった。大英帝国は1837年ビクトリア女王が即位し、国運と共にインド、セイロン、ケニアを生産拠点とし、紅茶王国確立に邁進することになる。

## 10 イギリス紅茶文化の垂直的拡大と水平的拡大

階級制の明確なイギリスでは、snobism (スノビズム) 上流気取りという特有の風潮がある。これは所得が上がることによりワンランク上の階層のライフスタイルを取り入れる傾向のことである。ヴィクトリア時代のイギリスの経済の繁栄は国民所得を増加させ、かつての上流階層文化は、上層、中層、下層中産階級へと波及していく。17世紀の宮廷と貴婦人の喫茶文化がしだいに下層へ浸透し、19世紀末にはイギリス国民全体の文化として定着した。ビクトリア中期になると、家庭生活はどうあるべきかという思想が求められるようになる。当時の小説家や評論家たちが取り組んだテーマで、男性たるものひとたび世間にいれば7人の敵に対峙しなければならない。だから、男はそうした危険や誘惑、過誤、罪科から安全な避難所を必要とする。その避難所が家庭であるというのが当時の家庭観である。1861年に出版されたビートン夫人の『家政読本』(Book of Household Management, 1861) は、家庭をあづかる主婦のための心得として静かなブームをよんだ。家事労働の心得と料理法に力点をおいたもので、内容の大部分が料理法となっている。この中においしい紅茶の入れ方がある。

陸羽の『茶経』の茶の入れ方から、イギリスのビートン夫人の『家政読本』においてのおいしい紅茶の入れ方にみられるように、東洋の茶の文化が西洋のティー文化に姿を変えて定着したのである。

To Make Tea (“Household Management” by Mrs. Isabella Beeton, 1861)

There is very little art in making good tea ; if the water is boiling, and there is no sparing of the fragrant leaf, the beverage will almost invariably be good. The tea pot must be kept dry. Delicately-flavoured tea is better made in an earthen than a metal pot. The old-fashioned plan of allowing a teaspoonful to each person, and one over, is still practiced. Warm the teapot with boiling water ; let it remain for two or three minutes for the vessel to become thoroughly hot, then pour it away. Put in the tea, pour in from half to three-quarters of a pint of *freshly boiling* water, close the lid, and let it stand for the tea to draw from 5 to 10 minutes ; then fill up the pot with water. The tea will be quite spoiled unless made with water that is actually *boiling* as the leaves will not open, and the flavour not be extracted from them ; the beverage will consequently be colourless and tasteless—in fact, nothing but tepid water. Neither will it be good if the water has simmered for hours.

## II 茶がモチーフとして用いられた文学

1837年イギリスではヴィクトリア女王が即位し、1901年81歳で没するまで63年間栄光のヴィクトリア時代が続く。

この時代には多くの文豪が、新しい文明の産物である茶や紅茶について描き、また、作品の中で重要な場面を表現するモチーフとして用いている。

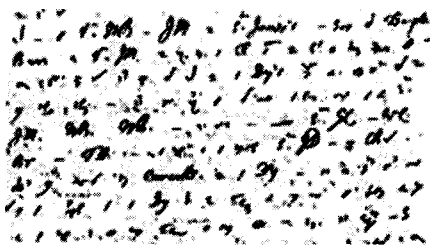
### 1 紅茶に関する散文

散文形式として初めての記述は、Samuel Pepys の『日記』である。この日記は、世相の観察や時代背景を描き、簡単に人に読まれないうる速記で書かれた貴重なものである。

I did send for a cup of tea (a China drink), of which I never had drank before, and went away (the King and the Princess coming up the river this afternoon as we were at our pay).

「私はこれまでに飲んだことのない一杯の紅茶（中国の飲み物）をとりにやり、外に出た（国王と王妃が午後テムズ河を上ってこられたからである）」

ピープスはかなりの好奇心をいだいて、最初の「茶」を飲んだのだろう。また、一杯の茶には新しい文明の香りが漂っていたはずである。



速記で書かれたピープスの日記の一部

## 2 紅茶に関する最初の詩

エドモンド・ウォラー (Edmund Waller 1606-1687) の『王妃よりすすめられて、紅茶をうたう』が最初の詩である。この王妃とは前出のイギリス王室ではじめて紅茶を飲んだキャサリン・オブ・ブラガンザ (キャサリン王妃) で、王妃 24 歳の誕生日を祝って 1662 年 11 月 25 日に書かれた。紅茶に対する賛美は、ウォラーの革命の流血騒ぎや争いはもうこりごりだという気持ちが紅茶にたくして強く歌われているように感じられる。

### On Tea By Edmund Waller

Venus her myrtle, Phoebus has her bays ;  
Tea both excels, which she vouchsafes to praise.  
The best of Queens, and best of herbs, we owe  
To that bold nation, which the way did show  
To the fair region where the sun doth rise,  
Whose rich productions we so justly prize.  
The Muse's friend, tea does our fancy aid,  
Repress those vapors which the head invade,  
And keep the palace of the soul serene,  
Fit on her birthday to salute the Queen.

茶によせて  
学問と芸術の女神ミューズの友  
である茶は、私たちの想像力を  
助けてくれる。頭を襲うあの悪  
い毒気を抑えて、魂の宮殿を静  
朗に保つ。  
茶は王妃さまのお誕生のあいさ  
つにふさわしい贈り物。

## 3 “The Task” from Book 4 William Cowper 1731-1800

経験主義者で、あるクーパーは、John Newton と一緒に書いた『アメイジング・グレース』他 68 のキリスト教の賛美歌を書いた。クーパーの詩集『仕事』(The Task) は Book 1 から Book 6 の構成で、「ソファ」「時計」「庭園」「冬の夕暮れ」「冬の朝の散歩」「冬の真昼の散歩」のタイトルがあり、5000 行の大作である。The Task『仕事』Book 1 “The Sofa” の 749 行目はよく知られている。

The Task : from Book 1 : The sofa

749 God made the country, and man made the town. 神は自然を造り、人は町を造  
750 What wonder then that health and virtue, gifts った  
751 That life holds out to all, should most abound  
752 And least be threaten'd in the fields and groves?

Book 4 「冬の夕暮れ」の 36 節で紅茶がモチーフに用いられている。

The Task : from Book IV : The Winter Evening

36 Now stir the fire, and close the shutters fast,  
37 Let fall the curtains, wheel the sofa round,  
38 And, while the bubbling and loud-hissing urn,



- 39 Throws up a steamy column, and the cups,  
 40 That cheer but not inebriate, wait on each,  
 41 So let us welcome peaceful ev'ning in.  
 36 さて火をおこし、蓋をしっかりと閉め  
 37 カーテンをおろし、安楽椅子（ソファ）をまわせ、  
 38 そして、やかんのお湯がぶくぶく音をたて、  
 39 ポットから湯気がのぼり、また元気づけてはくれるが、  
 40 酔わせることのない紅茶が、めいめいを待っていてくれる、  
 41 心静かな夕暮れを迎えいれよう

(under line は筆者)

18世紀まではイングランドの飲み物はビールかぶどう酒、ジンで、酒飲みの害は肉体的、精神的にも決して少ないものではなく、社会的には見逃せない問題であった。ホガースは「ジン横丁」を描き、怠惰・悲惨さ・身の破滅を描いている。それに比して、紅茶は、心静まるそして温かな飲み物で、この穏やかな情景は喜びに満ちたものといえる。



ジン横丁 ホガース 1750

#### 4 Mothergoose

18世紀後半紅茶を飲む習慣が一般の市民階級に広がると、庶民の生活に密着したナーサリーライムとして知られるマザーグースにも歌われるようになった。

“Polly put the kettle on”

Polly put the kettle on,	Sukey take it off again
Polly put the kettle on,	Sukey take it off again,
Polly put the kettle on,	Sukey take it off again,
We'll all have tea.	They've all gone away
ポリーがやかんをかける	スーキーがやかんをはずす
ポリーがやかんをかける	スーキーがやかんをはずす
ポリーがやかんをかける	スーキーがやかんをはずす
みんなでお茶にしましょう	みんなどこかへいっちゃった

(お客はみんな帰った)

Polly は、Poll=Moll (Mary メアリーの愛称で 18 世紀中頃の中流家庭でよく使われた。

Sukey は、Susan あるいは Susanna の愛称。これも 18 世紀の中頃の中流家庭でよく使われた。小文字の sukey はこの歌から、やかん tea-kettle の意味になった。

たわいのない歌であるが、生活の中に紅茶が入っていることがうかがえる。この歌は、食

べ物ではなく tea だけを歌っている貴重なものの一つ。日本の花いちもんめのように一列に並んで交互に前に進んで歌われ、単純で楽しく、庶民の現実の生活と切り離すことのできない素朴な感情が歌われている。Charles Dickens (1812-70) の Barnaby Rudge の中からすが叫ぶことば Hurray! Polly put the kettle on を使っている。また、アガサクリスティーの長編「杉の棺」(Sad Cypress, London, Collins, 1940) の中でも、昔この歌を歌って遊んだことが語られ、紅茶が生活の中に定着していることを表している。

## 5 “David Copperfield” Charles Dickens, 1812-1870)

チャールス・ディッケンズ代表長編作『デビッドコパーフィールド』の中にも紅茶の場面が登場する。

彼は幼少の頃の生活は悲惨で、両親や幼い兄弟は刑務所に入れられ、ディッケンズだけが靴墨工場で働いていた。彼はおそらく暗い冷たい夜の食卓でただひとり、まずい食事を紅茶とともに流し込んだ日もあったに違いない。自伝風に書かれたこの作品ではデビッドが生まれるときの様子を描きながらその母親が気持ちを落ち着かせるために紅茶を飲むことを勧められる場面がある。このときすでに父親は死んでいたので伯母がやって来たときの会話。

“David Copperfield” – Chapter 1 –

“Well? Said Miss Betsey, coming back to her chair, as if she had only been taking a casual look at the prospect; ‘and when do you expect –’

‘I am all in a tremble,’ faltered my mother. ‘I don’t know what’s the matter. I shall die, I am will,’ said Miss Betsey, -----

‘No, no, no,’ said Miss Betsey, ‘Have some tea.’

‘Oh dear me, dear me, do you think it will do me any good?’ cried my mother in a helpless manner.

‘Of course it

とにかくそのとき、(母) がふと見ると、伯母は窓のところに立っている。夕闇はほとんど真っ暗で、二人はほんやり顔を見合わせたものの、それさえ暖炉の火でもなければとうていできなかっただろう。「どう？」とミス・ベッチーは、再び椅子の方へ戻りながら言った。ほんの何気なく、ただ外の景色を眺めていたとでもいうような格好だった。「それでいつなの生まれるのは？」「わたし何だか身体中がぶるぶる震えて」と母はオロオロ声で言った。「何だかさっぱりわかりませんの。きっと死ぬんじゃないかしら」「とんでもない！」ミス・ベッチーは言う。「さ、お茶をお上がり」「あらそんなもの効くものですか」と叫んだが、母はもう消え入りたいような格好だった。「効くともさ、勿論」(中野好夫訳)

このショックで、母親は翌日の金曜日に男の子デビッドを出産する。

18 世紀までの人がほとんど紅茶の薬用効果を信じていたように、彼女もそんな古い世代

の人だったのかもしれない。紅茶は人の気持ちを落ち着けたり、興奮させたりするが、これも含めて薬用効果と見ている向きもある。実際 17 世紀半ばごろには、薬局で茶が売られていた。また、宣教師アレキサンダー・ド・ロードは、「一般に長命な諸国民（中国・日本）の健康に大きく寄与しているのは、テ *tay* である。テは消化を助け胃の負担を軽くするので正餐の後にとる。テは腎臓を清め、痛風や尿石を防ぐ働きをする」と記している。

## 6 “Sons and Lovers” D. H. Lawrence, 1885–1930

文学界におけるモダニストの一人に数えられる D. H. ロレンスの最初の主要な作品『息子と恋人』（*Sons and Lovers*, 1913）に紅茶の場面が登場する。彼の小説家としての主題として考えられるのは、『チャタレイ夫人の恋人』にあらわれる「性」であるが、モダニストのひとりとしてロレンスは既成の概念にとらわれず絶えず新たな領域へ進もうとしている。人間心理の洞察において優れ、男女関係を扱う場合もこれまでなかった角度から男女関係の認識をしているのが『息子と恋人』であり、ディケンズの『デビッドコパーフィールド』と同じくロレンスの自伝的な作品である。モレル夫妻は父母、ポールは作者自身である。

主人公ポール・モレルは母親に連れられて農場にでかけた時、一人の女性ミリアムと知り合う。ポールの父親は活気のある大酒飲みの炭鉱労働者で若い頃はダンスに熱中していた。息子たちも上級の学校に入れて出世させようという気はない。母親（モレル夫人）は教養のある非常に知的な中産階級の人間で、二人は惹かれて結婚したもの、階級と宗教という超えられない壁があり、争いが絶えない。彼女は夫に愛想をつかし、愛する対象を夫から子どもに向け、子どもに自分の夢と希望をかける。父親の暴力から母親を守ろうとするポールは、愛においてミリアムに属しているにもかかわらず、生命の奥底において母親に属していることを認めざるを得なくなりミリアムをあきらめる。母親の死を通して、ポールの精神を束縛していた何かから解放し独立した自由な「生」を求めていくことが示唆されている作品で、内容は重いものである。現代の今でも、この小説の提起した母と息子の関係は、未解決の大きな問題といえる。夫婦はひどく争うことが作品に描かれている。あるときには、夫人は妊娠しているにもかかわらず、家の外へ押し出されて、かなり長い間庭で時を過ごさざるを得ないこともあった。夫に引き出しをぶつけられて額に傷がつき血が流れ落ちるということもあった。このような争いの原因は、モレルが酒飲みで家のことを大事にしないからだと書かれている。あくまでモレルは悪役に描かれる。モレル夫人と加害者のモレル。夫人は満たされない女性と書かれ、原因は、酒を飲み、そのため小銭を盗んだりするような、夫として父親として失格なモレルにあるという。モレルはそれほど悪い男であったか。彼は労働者としてきちんと働いていたし、賃金が安いとしても、それは必ずしも彼の責任ではない。彼は妻より朝早くおき、自分で朝食をつくり弁当まで作ってでかけていく。妻を起こすどころか紅茶を入れ、ベッドまで運んでやる優しさも持っている。しかし、彼女の夫への理想像

とは、酒を飲まず禁欲的な人で一口でいえば、ヒートンのような牧師であった。その場面を見てみよう。

“Sons and Lovers” – Chapter 2 – The Birth of Paul, and Another Battle

---as Morel smashed the remainder of the coal to make the kettle, which was filled and left on the hob, finally boil. His cup and knife and fork, all he wanted except just the food, was laid ready on the table on a newspaper. Then he got his breakfast, made the tea, packed the bottom of the doors with rugs to shut out the draught, piled a big fire, and sat down to an hour of joy. He toasted his bacon on a fork and caught the drops of fat on his bread; then he put the rasher on his thick slice of bread, and cut off chunks with a clasp-knife, poured his tea into his saucer, and was happy. With his family about, meals were neer so pleasant.-----  
He filled his tin bottle with tea. Cold tea without milk or sugar was the drink he preferred for the pit. Then he pulled off his shirts, and put on his pit-singlet, a vest of thick flannel cut low round the neck, and with short sleeves like a chemise. Then he went upstairs to his wife with a cup of tea because she is ill, and because it occurred to him.

“I’ve brought thee a cup o’tea, lass,” he said.

“Well, you needn’t, for you know I don’t like it,” she replied.

“Drink it up; It’ll pop thee off to sleep again.”

She accepted the tea. It pleased him to see her take it and sip it.

“I’ll back my life there’s no sugar in,” she said.

“Yi-there’s one big ‘un,” he replied, injured.

“It’s a wonder,” she said sipping again.

モレルは石炭の残り火をたたき割ると、やかんに水をいれ、暖炉にかけてお湯を沸す。紅茶茶碗とナイフとフォーク、食物を別にすれば必要なものはすべて食卓に新聞を敷いて並べてやる。やがて彼は朝食を運び出して紅茶を入れ、あちこちのドアの下の際間にボロ布をつめてすきま風が入らないようにしてから暖炉に景気よく火をたいてどっかとお腹をおろし、一時間ほど楽しむのだった。ベーコンをフォークにのせて焼きながら、したたってくる脂をパンで受ける。そのベーコンを厚く切ったパンの上ののせるとポケットナイフで一口ずつ切り取って口に運び、紅茶は茶碗の受け皿にあけて飲む。このとき彼は幸福だった。周りに妻や子どもがいたのではこんな楽しい食事は味わえなかった。

錫製の水筒には紅茶をいれる。坑内で飲むには、ミルクも砂糖も入れない冷たい紅茶が好きだった。それからシャツを脱いで、坑内用の下着を着る。首の回りを広くくり、

シュミーズのように袖が短くなっているシャツだった。

それから二階の妻に紅茶を持って行ってやった。妊娠中で具合が悪いということもあったが、気まぐれに思いついたせいもあった。

「おい、紅茶をもってきたよ」彼は言った。

「そんなことをしなくてもいいのに、わたしが紅茶が嫌いなのは知っているじゃないの」

「飲みなよ。それでまたよく眠れるよ」

彼女は茶碗を受けとった。彼女が茶碗を持って静かに飲んでいるのを見ると、彼は満足げだった。

「全然お砂糖が入っていないわね」

「入っているさ——でかい塊が一つ入ってるよ」彼はむっとして答えた。

「どうかしらねえ」彼女は言いながら、又一口飲む。(underline は筆者)

中味を受け皿に移して飲むことは、いくつかの労働者階級のやりかたであることを、ジョージ・オーウェルはヴィクトリア時代の露天商の挿絵の中の説明として、「都会の貧しい人々の多くは住居に料理の設備もなく、その暇もなく、食物はほとんどみんな露天の食べ物屋から調理したものを買っていた。朝早く仕事に出る人々は、朝食をストリート・コーヒー・ストールでとる。カップには取手がついているのに、この男はまるで18世紀のティーボールのように受け皿から飲んでいる」と述べている。チャールズ・ディッケンズの『ボズのスケッチ』の中のジョージ・クルックシャンクによる挿絵にも、このコーヒー・ストールで皿で飲む姿が描かれている。ローレンスも中産階級の労働者を意識してモデルにこのような表現を用いたものと思われる。



ボズのスケッチ集  
チャールズ・ディッケンズより

他方、モレルの側から見れば、牧師のためにはきれいなテーブルクロスを用意することはあっても、疲れてのどが渇いて帰ってきた夫にビールの用意もしていない夫人は理解できぬ存在であった。争いの最大の理由は、二人がまったく違ったビジョンを持っていることである。次の場面をみてみよう

Occasionally the minister stayed to tea with Mrs. Morel. Then she laid the cloth early, got out her best cups, with a little green rim and hoped Morel would not come too soon.

They were half way down their first cup of tea when they heard the sluther of pit-

boots.

“You know you drank all the beer,” said Mrs. Morel, pouring out his tea.

“An’ was there no more to be got?” Turning to the clergyman—“A man gets the caked up wi’ th’ dust, you know,—that clogged up down a coal-mine, he NEEDS a drink when he comes home.”

“I am sure he does,” said the clergyman.

“But it’s ten to one if there’s owt for him.”

“There’s water-and there’s tea,” said Mrs. Morel.

“Water! It’s not water as’ll clear his throat.”

He poured out a saucerful of tea, blew it, and sucked it up through his great black moustache, sighing afterwards. Then he poured out another saucerful, and stood his cup on the table.

“My cloth!” said Mrs. Morel, putting it on a plate.

“A man as comes home as I do’s too tired to care about cloths,” said Morel.

“Pity!” exclaimed his wife, sarcastically.

二人が一杯めのお茶をまだ飲み終わらないうちに引きずるような坑夫の靴音が聞こえた。

「ビールはみんな飲んじゃったじゃありませんか。」ミセス・モレルは彼の紅茶を注ぎながらいった。

「あれでおしまいだっていうのか？」と言ったモレルは牧師の方をむくと、「何しろ真っ黒になっちまうだろう 炭坑の真ん中にいるとほこりだらけになっちまうからね。帰って来たら飲まずにはいられないんだよ」

「それはそうでしょうね」牧師はいった。

「ところがたいい何もありはしない」

「水がありますよ。——紅茶だってあるし」とミセス・モレルが言う。

「水！水なんかで満足できるものか」

彼は紅茶を受け皿にあけると、ふうふう吹いて、黒い大きなひげを濡らしながら飲み、今度はため息をついた。それから、また一杯受け皿にあけて、茶碗をテーブルの上においた。

「テーブル掛けが！」ミセス・モレルが言ってその茶碗をそばの大皿にのせる。

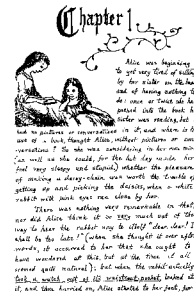
「おれみたいにくたびれて帰って来たら、テーブルかけになんか構っちゃいけないんだ」モレルは言った。

この『息子と恋人』の茶のシーンは人間模様の多くを語りかけている。階級社会により紅茶の飲み方が異なっていることや夫婦のひとときの心のつながいを紅茶に求めていること。テー

ブルクロス一枚についてでさえ、モレルとモレル夫人の考え方のちがい、価値観の違いがあること。二人のビジョンの違いを生活全体から表現し、人間関係へと導く材料として、当時の話題性のある紅茶を用いて描いていることである。

## 8 “Alice’s Adventures in Wonderland” by Lewis Carroll, Charles Ludwidge Dodgson (1832–98)

このアリスの物語はテニエルの挿絵とともに知られている。1862年7月4日、ドジソンは友人のダックワースとリデル家のかわいい3人娘、ロリーナ、アリス、イーデスを伴ってテムズ河の舟遊びにでかけ、河遊びの時間のすざびに、少女たちに求められるまま語りだされたのがこの物語のはじまりである。とりわけお気に入りのアリス・リデルの願いに応じて37枚の挿絵を描きそえ、本の末尾に彼女の写真を入れてプレゼントとしておくれたのが、『アリスの地下の冒険』(Alice’s Adventures Under Ground, Holt, Rinehart and Winston, 1985) である。



Alice’s Adventures Underground, 1985

All in the golden afternoon  
Full leisurely we glide;  
For both our oars, with little skill,  
By little arms are plied,  
While little hands make vain pretence  
Our wanderings to guide.

黄金輝く 昼下がり  
川面をすべる ゆたゆたり  
櫂をとる手の つたなくも  
小さき腕 動かせる  
ふりはすれども かいもなく  
さ迷い行ける あてもなく

アリスが夢の中で、「ああ、たいへんだ、たいへんだ。きつともう間に合わないぞ」というウサギに出会って走っていくと「ひょっとしてわたしは地球をまっすぐ突き抜けて、落ちていくんじゃないかしら」と思うほど深い穴に転げ落ちた。この落ちたところを地下すなわち、underground と名づけたのがはじまりで、3年後 ‘Pig and Pepper’, ‘A Mad Tea-Party’, ‘Who Stole the Tarts?’, ‘Alice’s Evidence’ の裁判の部分などが付け加えられ、後に、『不思議の国のアリス』になった。主人公のアリスも顔負けの個性豊かな生き物が次々と現れてはそれなりの論理を振り回してアリスをそして読者をけむにまいていく。

アリスは地下の世界へ落ちていくにしたがって、自分のアイデンティティが剥がれ落ちていく経験をする。頭の中は地上世界を引きずっているが、身体は地下に適応していかざるを得なくなる。また、地下での会話のマナーを習得する課題を与えられているのである。地上世界での弱肉強食の生存競争をその頂点に経つ人間の立場から語ってしまう。アリスにはみんなの態度が理解できずにいるのである。たとえば、白ウサギが地下に住む女の子はみんな

召使で「メアリー・アン」と言う名前（メアリー王妃とクイーン・アンスタイルを築いたアン王女をくっつけた）で、小さい女の子＝召使＝メアリー・アンという同一性を通してしか世界を認識していない。地下の住人がアリスに近づいたとき、彼らはアリスを人間だとは思っていない。アリスが自分を人間だと思っているかぎり、地下の世界の住人から隔てられるほかないのである。時も地下と地上では違っている。地下では現在のみで未来はない。ところが、アリスは自分がいる現在の場を無視して、チェシャー猫に「どの方向に行けばよいか」「このあたりにどんな人が住んでいるか」未来のことや出会う以前に「どんなひと」かを知ろうとする質問をする。チェシャー猫は三月ウサギと帽子屋がいること、その家の方向を教えてもらうが、どちらも気が狂っていると言われて、受入れる。おまけにアリスもチェシャー猫も気狂いと決められてしまう。アリスが人間として、「わたしは～である」「みんなは～だ」ときめている限り、物事は解決しないことを理解していないのである。

第Ⅶ章『きちがいのお茶の会』（A Mad Tea-Party）は当時盛んな afternoon tea や tea garden でお茶を楽しむということから発想されたと考えられる。アリスは、チェシャ猫



A Mad Tea Party

（Cheshire-Cat）に教えてもらった三月ウサギ（March Hare）の耳の形をした煙突、毛皮ぶきの屋根の家にとどりつく。家に入れるように2フィートに縮んでから近づく。家の前の木の下では大きなテーブルの片隅に集まって帽子屋（Hatter）と三月ウサギ（March Hare）が二人の間でぐっすり眠っている眠りねずみ（Dormouse）をクッション代わりにお茶会の真最中である。

お茶会に入れてもらおうとアリスはテーブルに近づくと、アリスは「あいていないよ！」（No room）と制止される。しかし3人が大きなテーブルの片隅に座っているので、「たくさんあいてるじゃないの！」（There's plenty of room!）と気丈にも言い返し、端のひじかけいすに強引に座ってしまう。

The table was a large one, but the three were all crowded together at one corner of it." No room! No room!" they cried out when they saw Alice coming. "There's plenty of room!" said Alice indignantly, and she sat down in a large arm-chair at one end of the table.

さあたいへん。〈(席)があるものをないかのように〉いわれたのにかかわらず、相手の思惑を無視して逆らったので、ことあるごとに〈ないものがあるかのように〉やり込められることになる。さっそくアリスは三月ウサギから「ワインはどう？」と尋ねられる。どこを探してもみあたらないので、「見えないわ」といえば「(見えないのはあたり



まえだろう。始めから) ないんだもの」「ないものをすすめるなんて失礼ね」と言えば、「招かれてもいないのに席につくなんて失礼じゃないか」とエチケット違反をなじられる。

“Have some wine,” the March Hare said in an encouraging tone.

Alice looked all round the table, but there was nothing on it but tea. “I don’t see any wine,” she remarked.

“There isn’t any,” said the March Hare. “Then it wasn’t very civil of you to offer it,” said Alice angrily.

“It wasn’t very civil of you to sit down without being invited,” said the March Hare.

“I didn’t know it was your table,” said Alice : “it’s laid for a great many more than three.”

『ワタリガラスに文机とかけてなんと解く?』となぞ解きというよりはことばのすりかえで、論争となる様子が描かれたり、帽子屋 (Hatter) がポケットから時計を出しながら「今日は何日か」 (What day of the month is it?) と尋ねる。三月ウサギが油の代わりにバターを塗ってしまったり、時計に時刻がなく、日付しかないといわれてアリスにはさっぱり意味がわからない。Time 君と仲たがいしてしまったため、6時のお茶の時刻から動かなくなっている所以で日に変化する時計であることを知ることになる。話題を変えようと、それまではほとんど居眠りしていた Dormouse がお話することになる。ここでも語句の一部がすりかえられていてどうもはっきりしない。アリスはお茶会にきて、三月ウサギにお茶のお代わりを勧められる。まだ一杯のお茶ももらっていないアリスがそもそもないものより多くなんて出来ないといえ、Hatter (三月ウサギ) はゼロより少なくはだめでもゼロより多くは可能だと反論する。

“Take some more tea,” the March Hare said to Alice, very earnestly.

“I’ve had nothing yet,” Alice replied in an offended tone : “so I can’t take more.”

“You mean you can’t take less,” said Alice.

“Who’s making personal remarks now?” the Hatter asked triumphantly.

Alice did not quite know what to say to this : so she helped herself to some tea and bread-and-butter, and then turned to the Dormouse, and repeated her question.

とうとうアリスも、あまりの無礼な言い方に憤然として席を立つ、ところがアリスの思惑に反し、引き止めず、誰も気にとめてくれない。それどころか、すっかり眠りこんでしまった眠りねずみ (Dormouse) をティーポットに押し込めるのに懸命なのです。しかたなく、アリスは森の中を通りながら、「あんなところ二度と行くもんですか、あんな

なばかばかしいお茶会なんて、はじめてだわ」と捨てせりふをはく。これは身勝手さにおいては、席がないといわれたのに座った冒頭部と同じになっている。茶会はおいしい菓子や紅茶が出て楽しいもの、であるのは地上の話。ここでもアリスは、地上の常識を持ち込んで考えている。ナンセンスな茶会、これが地下のあたりまえ。アリスはそれに気がつかず、茶会の場を去るのである。

This piece of rudeness was more than Alice could bear: she got up in great disgust, and walked off: the Dormouse fell asleep instantly, and neither of the others took the least notice of her going, though she looked back once or twice, half hoping that they would call after her: the last time she saw them, they were trying to put the Dormouse into the teapot. "At any rate I'll never go *there* again!" said Alice, as she picked her way through the wood, "It's the stupidest tea-party I ever was at in all my life!"

### III 最後に

日本人は外国文化を受け入れ、自国の文化に変化させるのが得意な国民であるといわれている。いっぽう、イギリス人はたいへんかたくなで、古い伝統や文化を大切に守ろうとする国民であるといわれている。ところが、今回のテーマの中で述べたようにイギリス文化の代名詞というべきアフタヌーン・ティーは私たちの身近な中国や日本の“茶文化”（東洋）を受け入れ、すばらしい文化にしたてあげたといえる。時は、ヴィクトリア朝、文学の花が開いた時代。多くの文人たちがこぞってこの新しい飲み物を取りあげ、また、これを題材にしなければ時の人でないと言われるのを恐れるかのように、茶をモチーフに使っている。そして、そのモチーフと共に、イギリスにおける階級性やヴィクトリア時代の女は家庭・男は仕事の思想を暗黙のうちに読者に語りかけているのである。家庭や社会での人間観、人生観、人間関係を語るには欠かせないモチーフになっている。本稿では、作品の一部しか取り上げることができなかったが、E. M. Forster の“A Room with a view”(眺めのいい部屋)、Emily Bronte の『嵐が丘』、Jane Bronte の『ジェイン・エア』などの茶の場面にも階級性、人間観などがテーマとして展開されている。イギリス本国で生産できない Tea が植民地政策など歴史的背景のもとに、東洋から西洋へ、そしていまや私たちは Tea はイギリスのものと決めている感もある。東洋文化が影響を与え、文学の中においても花咲き、私たちを楽しませ、時には人生を語ってくれるのである。

本稿の一部は平成 16 年度相愛女子短期大学土曜講座「いろいろな角度から人間を見る」田中朋子の担当部分『作品にみるお茶の風景』から一部引用していることをお断りしておきたい。

注

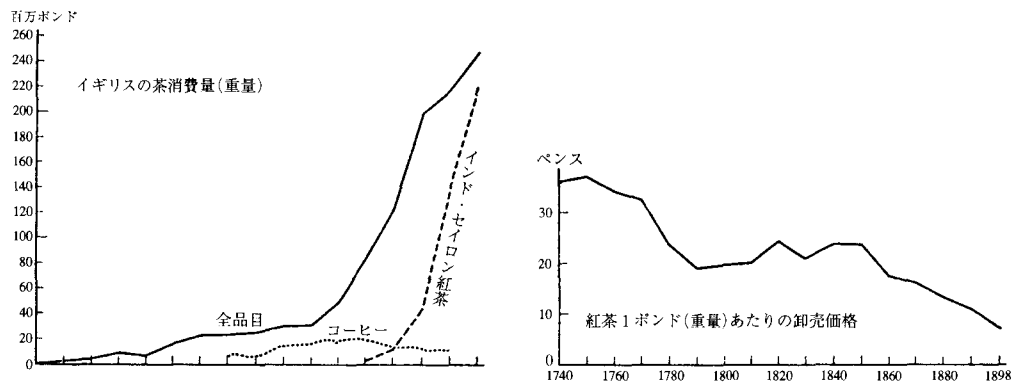
(1) 各国別「チャ消費」推定量

国 名	総量 (トン)	一人当たり 年間杯数	国 名	総量 (トン)	一人当たり 年間杯数
アイルランド	11,400	1,590	クウェート	4,500	1,330
イギリス	144,000	1,230	イラク	*45,000	1,250
ニュージーランド	4,300	620	カタール	1,100	1,000
チリー (南米)	13,900	490	トルコ	119,000	970
オーストラリア	17,100	480	シリア	20,400	770
ポーランド	28,900	380	バーレーン	800	690
ロシア	149,000	260	スリランカ	23,300	650
オランダ	8,000	260	イラン	79,900	590
カナダ	13,600	235	パキスタン	111,000	430
デンマーク	1,900	180	サウディアラビア	14,300	320
米国	89,500	170	アフガニスタン	*11,000	
スウェーデン	3,000	170	インド	598,000	320
スイス	1,700	120	ケニア	13,500	220
旧西ドイツ	18,900	115			
ノルウェイ	900	110			
フランス	12,600	110	日本 紅茶のみ		
オーストリア	1,480	90	チャ合計		
ベルギー/ルクセンブルグ	1,290	60			
チェコスロヴァキア	1,300	60			
				15,000	60
				127,000	510

\*推定

1994-1996 年ベース。International Tea Committee, Annual Bulletin of Statistics, 1988 より「年間推定消費総量」を「総人口」で割り、「一人当たり年間推定消費量」を求め、さらに2で割ったもの。TBや CTC の全盛期を考慮して、1 カップあたり 2 G の使用量とした。また、緑茶主体の消費各国の数字は省略。

(2) イギリスの茶消費量



イギリスにおける茶消費量の増加と価格の低下 (1740-1898)

(加藤祐三、1979)

引用・参考文献

- 田中朋子 平成 16 年度相愛女子短期大学土曜講座「いろいろな角度から人間を見る」第 4 回「作品に見るお茶の風景」
- 出口保夫『英国紅茶の話』1982 東書選書 77 東京書籍
- 布目潮風『茶経詳解』平成 13 年 淡交社
- 白田昭『サムエル・ピープスの日記』第 1 巻 1987 国交社
- 川端康雄『小野二郎セレクション』2002 平凡社
- 角山榮『茶の世界史』1980 1980 中央公論社
- 角山榮『路地裏の大英帝国』2001 平凡社
- G. オーウェル『オーウェル著作集』1970 平凡社
- 小川晃一『英国社会における伝統と変化』1973 お茶の水書房
- 安藤幸江『Nursery Rhymes』1997 北星堂書店
- 月森左知訳『イギリスの歴史』2004 創土社
- 加藤裕三『イギリスとアジア』1980 岩波新書
- 滝口明子訳『茶の博物誌』2002 講談社学術文庫
- D. H. ロレンス 筑摩世界文学大系『息子と恋人』他 1976 筑摩書房
- Banks J. A. Prosperity and Parenthood: "A Study of Family Planning among the Victorian Middle Classes", 1954
- Marshall, Dorothy "The English Domestic Servant in History", 1949
- Pettingrew, Fane "A Social History of Tea", 2001 National Trust Enterprises Ltd.
- Dickens, Charles "David Copperfield 1983", Oxford University Press
- Dickens, Charles "Sketches by Boz, and early minor works", 1996 Reprinted by Hon-no-Tomosha
- Carroll, Lewis "Alice's Adventures in Wonderland", 1960 Penguin Books Ltd
- Carroll, Lewis "Alice's Adventures under ground: facsimile of the author's manuscript book", 1965 Dover Publications
- Pepys, Samuel "Diary of Samuel Pepys"
- Beeton, Isabella Mary "All about cookery: with over 2,000 practical recipes", 194? Ward Lock & Co., Ltd.
- Beeton, Isabella Mary "Household Management", 1861, Ward Lock & Co., Ltd.
- Cowper, William "The Task; a poem in 6 books", 1883 Macmillan
- Lawrence, D. H. "Sons and Lovers", 1922 The Modern Library